

春から初夏へ 浜松文芸館へようこそ！**企画展「浜松凧まつり今昔物語～町名と凧印の由来～」****平成30年4月24日(火)～7月1日(金) 入館料無料**

あれよあれよという間に5月。生け垣を飾る薔薇の花に目を奪われる頃となりました。美しい5月の始まりです。街行く人もさわやかな軽装姿に変身、初夏の風に心地よく足取りも軽いようです。さて、ここ浜松文芸館の展示室も、先月末に衣装替えをしました。今回のテーマは、「浜松凧まつり」です。今年の浜松まつりに参加した173カ町の凧印をはじめ、磐田市在住の郷土史家・小林佳弘氏が調べまとめた「浜松の町名と凧印の由来」の解説パネルがずらりと並んでいます。珍しいところでは、「復旧凧印」の一覧です。今に至るまで、凧印が二度三度変わった町内があります。例えば、鴨江町は昔、閻魔大王の凧印でした。その他、凧あげについて書かれた郷土誌「土のいろ」や様々な書籍、絵葉書など。熊谷光夫氏の浜松まつり美人画版画絵、大須賀義明氏の水彩画が室内を彩っています。祭りは終わりましたが、浜松文芸館でしばしの間、にぎやかで楽しい展示を見ながら、浜松まつりの余韻に浸ってみませんか。

春の講座がスタート。松平和久氏の『文学講座(春)』では、春雨物語(上田秋成作)の世界を味わいました。『文章教室I』『川柳入門講座』受講者の皆さんも、随筆を書いたり川柳を作ったりと熱心に取り組んでいます。まだまだ多くの講座が開催されます。広報「はままつ」・チラシ等を参考にしてください。たくさんのご応募をお待ちしています。

つれづれなるままに・・・先人に学ぶ

展示入替時には、踏み台に上ることが多々ある。「ヨイショ」と勢いつけて上ったのはいいが、問題は降りる時だ。調子にのってヒョイと降りようものなら、足下ふらつきねんざをしたりひどいときには尻餅をついたり。いやはや年はとりたくないものだと大きなため息をつく。徒然草の中に、「高名の木登り」という段がある。その中で、木登り名人曰く、「過ちは低きところにて起きるものだ。だから、降りるときにこそ用心しなければならない」と確か言っていた。まさにその通り。それからは、降りる時だけでなく、ことの終盤こそ気を抜かないようにしようにと意識しつつある。昔の人は生活の中で生まれた智慧を、きちんと言葉にして私たちに残してくれた。例えば、出勤時になかなか車の流れが途切れず入り込めない時、イライラは頂点に達する。が、「待てば海路の日和あり」だ。必ずや車の流れは変わる。急いで割り込み事故を起こしたら元も子もない。じっと待つことの大切さを説いているのだろう。これを教えてくれたのも祖母だった。私たちにもっとも近い先輩方の言葉や思いに大いに耳を傾けたい。

湖郷の詩人清水みのる 12

水泳部員としてスカウト、立教大学英文科に入学

浜松文芸館講演会講師 和久田雅之

文学少年仲間のたまり場であった亀屋は、その後浜松北高校周辺の大幅な区画整理により廃業、隣接の薬局は現在犀が崖記念館の道路を隔てた東角^{かど}に移転して営業している。「唄え！浜松」は次のように続く。

グリーン・エイジという時代である。同級の仲間と毎日ここでとぐろを巻いていた。

乳色の月光は甘く優しく あじさいの花片にふりそそぐ

その花蔭で彼と彼女は抱擁の 美酒に酔い続ける

夏近き夜の小夜曲の調べが 咽^{むせ}び泣く如き中に……。

そんな詩を作って有頂天になったのも、その頃であった。そして僕は、浜中から京都、広島へと、放浪し、ついに立教の英文科に学んで、今では「はやり唄、作ることの喜びと悲しみ」をいやというほど味わうようになったのだから話みたいだ。

浜中時代、怠惰な生活を送っていたみのるの仲間の中にも、硬派の不良と見られた連中と共に一人二人と学校を去って行った者がいる。そんな時、みのるは五十嵐^{いがらし}太刀雄^{たちお}の『海のロマンス』を耽読していた。2, 3 年上級で高等商船に在学していた岸龍雄^{きりたけお}がみのるの生活態度を心配して彼の士気を鼓舞^{むげん}させようとして送ってくれたものである。五十嵐太刀雄は、『船の世界周遊紀行』の著者である。この本の影響か、みのるは高等商船進学^{こうとうしょうせんがく}の夢を抱くようになった。しかし、浜中時代に短距離自由形で全日本ベスト5に入る記録を出したことが目に留まったようで、立教大学と明治大学から推薦入学の話があり、結局立教大学の英文科に入学することになった。

大学入学後のみのるの活躍は目覚ましく、50メートル自由形で当時の日本記録の次ぎかその次ぎに当たる29秒の好記録を出している。後年インタビューを受けて、「立教では50と100で大記録をつくった。50メートル最高の記録は27秒程度。2着は明治の村松、3着と4着を立教で取った。1, 3, 4位を立教で独占した時代があったということです。その後50メートル競泳は失くなってしまいました」と述べている。後にみのるは、水泳部のキャプテンに選ばれ、立教水泳部の部歌を作詞している。昭和49(1974)年頃には、水泳部のOBが集まると必ず歌ったという。

英文科でみのるは、岡倉天心^{そうく}の息である岡倉三郎教授の講義を3年間受けた。その時よく言われた忘れられない言葉があるという。

「清水さんは水泳に行くと言って午後の授業にはさっぱり顔を見せないが水泳と勉強とどちらが大切ですか。それに、あなたの読まれる1ヶ月の英文学書ですが、それは私が一日で読む分に当たっていないかも知れませんよ」と言うことであった。全く返す言葉もない苦言で、今思い返してみても冷や汗が流れる思いだが、これをそのまま作詞のことに代えて諸君の内の一部の人に言っても差し支えないように思う。

と、みのる主宰の作詞同人誌『レイク』(昭和30年5月号)に書いている。